

1. 合志市の概要

合志市のイニシャル「K」の文字をモチーフに、新市の将来像である「未来輝く産業・定住拠点都市」、基本理念「人と自然を大切に協働によるまちづくり」のイメージを表し、合志市の魅力と活力あふれる繁栄発展を象徴した市章としました。赤のポイントは市民の市政への情熱を示します。



合志市の市章

【沿革】

合志市は県都熊本市に隣接し、総面積 53.17 km²（東西約 12 km、南北約 8 km）で、北部地域は阿蘇の火山灰が降り積んだ黒ボクと呼ばれる火山灰性腐植土に覆われた広大な農地として広がり、県内有数の穀倉地帯となっております。熊本空港や九州縦貫自動車道からの利便性もよく、熊本電鉄線の沿線にあり、また、道路網も整備されたことから、昭和 40 年代以降の高度経済成長期から市街化が一挙に進み、住宅地及び商業地は、以前から国道・県道や熊本電鉄沿線に形成されていましたが、熊本市に隣接した南西部一帯に新市街地を形成しています。熊本都市計画区域の中で住宅都市として発展する一方、職住近接の産業都市としての面もあわせ持つ自然豊かな地域として発展してきました。

【二町の歴史】

合志市を含む地域は、古くは「火の道の尻の邦」（肥後）に属する郡として「加波志」と称していましたが、応神天皇期の地名改称によって「皮石」と改められ、和銅 6（713）年「好字好音」の詔により「合志」と呼ばれるようになりました。

旧合志町の竹迫周辺は、平安後期（1148）年には太宰府の荘園となっていましたが、その後、竹迫は合志郡の政治の中心として永く栄えました。その後、合志郡は明治 29 年の北隣菊池郡との合併で菊池郡となり合志の地名は、明治 22 年の町村制施行で成立していた合志村と西合志村に残されました。

明治 22 年 5 村が合併して誕生した西合志村は、天正 16（1588）年に肥後に入国した加藤清正の手による堀川、椎持往還（現県道 37 号（熊本菊鹿線））が交差し、白川下流と菊池阿蘇の台地を結ぶ回廊の役割を果たす重要な地域として発展してきました。

そして昭和 41 年の町制施行で、合志町、西合志町となりました。